

# 令和3年度 全国田畑耕地面積

## 前年比△0.5% 2万3,000ha減少

農水省は10月26日に7月15日調査現在の全国の耕地面積を発表した。全国の田畑の耕地面積は434万9千haとなった。うち田は236万6千haにて前年比1万6千haの減少、畑は198万3千haにて1万haの減少となり、田畑のいずれも0.5%の減少となった。荒廃農地からの再生等の増加はあったものの耕地の改廃、宅地への転用等による減少により2万3千haの減少となったようだ。全国の田畑の耕地面積は昭和36年の608.6万haをピークに現在まで28.5%減、面積にして173万7千haもの耕地面積が減少したこととなる。

### 耕地の拡大と改廃面積

耕地面積の増加と改廃面積は以下の通り。田畑合計の拡張面積は全国で7,410haであったのに対し、改廃面積は30,800haと4倍近くになっている。うち再生不可能と見なされる12,800haが荒廃農地となっている。田畑の荒廃農地の内訳は田で5,190ha、畑で7,610haとなっており、田よりも畑の荒廃農地化が大きいようだ。

### 地域別の減少面積

次に地域別の減少面積を見てみると、九州が一番大きく△5,200ha、関東・東山で△4,500ha、東北で△3,200ha、東海で△2,500ha、中国で△2,400ha、四国で△1,900ha、北陸で△1,300ha、沖縄で△500haとなっており、唯一北海道は増減なしとなっている。更に都道府県別でみると、一番減少が大きかったのは鹿児島で△1,900haとなっており、1年で1,000ha以上の耕地面積が減った県は熊本で△1,600ha、静岡・茨城で△1,300ha、福島・山形で△1,100haとなった。1,000ha以上面積が減少した県で田と畑の減少を見ると、鹿児島では水田が△900ha、畑が△1,000haとほぼ似たような減少面積となっているが、静岡では水田が△200haに対して畑が△1,000ha、茨城は水田が△800haに対して畑が△600ha、福島では水田が△800haに対して畑が△300ha、山形は水田が△600haに対して畑が△500haと県によって減少面積は異なるようだ。さらに田、普通畑、樹園地・牧草という項目で減少面積を見てみると、鹿児島では普通畑の減少が大きく△800ha、熊本では牧草で△300ha、静岡では樹園地で△800ha、茨城では田で△800ha、山形で田が△600ha、福島では田で△800haとなっている。いずれもおのおのの地域で主力産地の作物の作付面積が大きく減少していることが伺える結果となっている。この減少要因は高齢化による離農も勿論主因であることは間違いないのであろうが、その他の要因としては採算ベースに上がらないといった事で生産面積が減少したという事も減少要因として挙げられるだろう。主食用米は米余りで価格が下落し産地銘柄によっては再生産価格割れとなった。また、秋野菜ではニンジンや白菜などが安値傾向となった。こちらはいずれも産地における秋の好天も相俟ったことから豊作となり生産面積が需要量に対して供給過多となったために価格下落となっている事に他ならない。一方で、海外産に委ねられている小麦や大豆等の作物もある。こちらは世界の需要が旺盛で価格はうなぎのぼりだ。ただ、考えて欲しい事として海外の方が仕入れ単価が安いからといって国内生産の減少に目を反らし、金を出せば買えるうちは何も考えなくとも良いという風潮に流されがちだ。だがしかし、いざ海外依存度が高い状態の主食級の穀物や肥料原料、化学製品等において輸入国の都合や友好関係が崩れた時には供給停止や輸出制限といった制裁を科せられないとは言えない。直近では肥料原料や尿素水など、中国による輸出検査の強化と称した実質的な輸入規制が発動している事など現に我々の身近に起こっている話だ。輸出国からすれば自業自得と揶揄されても

(次ページへ続く)

(前ページより続く)

返す言葉もないだろう。依存し過ぎは有事の際にはダメージは大きく国益とはならない。食糧は生命維持に必要な戦略物資である。生産性の悪い田畑の改廃は無論必要なのだが、耕作面積を減らしている場合ではなく作物の場合はもう少し国内における生産バランスの改善も考えた政策を国は戦略的に組み立てなおす必要があるのではないだろうか。

## 北海道に来て食べたいものは？

11月下旬になり紅葉シーズンも終わりを迎え、少しずつ冬の気配が訪れている。今年はラニーニャ現象が発生していると気象庁から発表があった。気象庁のホームページに掲載されているが、冬の終わりまでラニーニャ現象が続かない可能性がある確率は40%、一方でラニーニャ現象が続く可能性は60%と高い発生確率が予測されている。2020年の年末年始は記録的な寒波が襲来し、大雪や凍結による事故のニュースが多く見られたため今年の冬も大雪の警戒が必要になりそうだ。これからの時期に北海道へお越しの際は気を付けていただきたい。緊急事態宣言も解除となり道内での食事も楽しみの一つであろう。直近の話題としては、北海道日本ハムファイターズの新庄新監督が食べたいと話していた、味の時計台のバターコーンラーメンだ。会見を見た後に直ぐに訪れた方もいたのではないだろうか。監督就任による経済効果は60億円とも言われ、その内90%の約54億円が北海道にもたらされるとの試算も出ており、コロナ禍が続くこの状況において新監督は道内を大いに盛り上げてくれるものと期待したい。

さて、北海道の大地で採れる季節毎の旬な農産物（じゃがいも、玉ねぎ、大根、人参、大豆、小豆等）や果物（さくらんぼ、ぶどう、ハスカップ、メロン等）は数多くあるが、これからの時期は海の幸が堪能出来る。北海道ならではの魚としては、ししゃも、ホッケ、ゴッコ（ホテイウオ）、マダラ、カスベ（エイの仲間）などがあるが秋味（シロザケ）も人気だ。その他の魚介類と言えば、やはりホタテ、毛ガニ、いか、牡蠣、いくら、たこなどではないだろうか。早速巡りたい場所、食べたいグルメのリストを書き出し始めた方もおられることと思うが、そんな魚介類の中で心配な事が起きている。9月中旬頃から北海道太平洋沿岸で発生し始めた赤潮や温暖化による海水温度の上昇に伴う漁業被害だ。鮭やウニ、たこ、イカ、ツブ貝の被害が深刻で収束の目途もなく、鮭では2万匹超、ウニも2,000トン強にもなっており、漁業被害額は凡そ170億円にも達するおそれがあるとも言われている。今年台風や低気圧等による時化が少なく、暖かい海水が攪拌されなかった事が赤潮発生の原因のようだ。我々農業業界も天候の影響を受け易いが、漁業関連も自然現象によって漁獲量が大きく変動する為、対応策が取り難いようだ。

北海道へ来られた際、アレルギー持ちでない方はいくら井やうに井を是非とも食して頂きたい一品だ。ただ不漁ゆえにお値段が張る事も覚悟の上ですが、お財布と相談しながら北海道ならではのグルメを堪能して頂きたい。その他にもしゃこやニシン、ジンギスカンやスープカレー、ザンギといった北海道ならではの食べ物も捨てがたい。また、あげいもやポークチャップ、スパカツといった道内各地のB級グルメもオススメだ。11月19日より冬の風物詩といえる第41回さっぽろホワイトイルミネーションが大通会場、駅前通会場等で開催される。札幌の街並みを幻想的に彩り、雪が舞えばより一層、色とりどりのイルミネーションを見る事が出来るので冬ならではの札幌の魅力を満喫して頂きたい。’札幌支店)



ホワイトイルミネーションの準備中

回転寿司でウニを見かけなくなっただけだと思っていいましたが、先日、久しぶりに回らないお寿司屋さんに行ったらウニの価格にビックリ。倍以上になっていました。高級品が超高級品になり、さらに手の届かない存在になりました。

編集事務局：南部、助川

電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>